

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

-高等学校保健体育科と家庭科における「共生社会の実現」に向けた教科横断的な学習の展開-

主幹兼室長 菊川 雅子

研究協力員 県立鹿本高等学校

教諭 左座 香織

指導主事 岩崎 敬志

研究協力員 県立鹿本高等学校

教諭 池田 将文

1 研究の視点

(1) 視点1『見方・考え方』に着目した問いの工夫について

①「カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れた教科横断的な学習」について

高等学校保健体育科と家庭科には、共通性及び連続性が見られる学習領域・内容がある。保健体育科の「保健：生涯健康」「体育：スポーツライフ設計」と家庭科の「家族・社会との共生（保育・高齢社会分野）」はその一例であり、現代社会において重要視されている「共生社会の実現」に向けた学習内容及び資質・能力の育成を含んでいる。しかし、互いの教科がこれを意識し、授業展開することは稀である。

一方で、カリキュラム・マネジメント（CM）の視点として、以下の3つの側面が示されている。

- i 各教科の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。
- ii 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育過程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- iii 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

そこで、「共生社会の実現」に向けた授業の効果的実践・展開をめざし、CMのiとiiiの側面を取り入れた教科横断的授業デザインを行った。（i：実施時期と学習内容の効果的配列）（iii：外部資源の活用）

②「教科横断的な学習」を貫く問い、及び各々の教科の題材を貫く問いについて

「体育の見方・考え方」は以下のとおりである。

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・**支える**・知る』の多様な関わり方と関連付けること

家庭科における「生活の営みに係る見方・考え方」は以下のとおりである。

家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、**協力・協働**、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること

保健体育科においては「支える」、家庭科においては「協力・協働」に着目し、2教科を貫く横断的な問い、及び各々の教科の題材を貫く問いを設定した。

【「教科横断的な学習」を貫く問い】

共生社会の実現に向け、社会の一員として、大人になった私たちが果たすべき役割は何だろうか。

【保健体育科の問い】

異世代を支えるスポーツの在り方は。

【家庭科の問い】

子どもの成長と発達に対して社会の一員として、どのように関わればよいだろうか。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

① 保健体育科における「振り返りの工夫」

ア 1時間授業ごとの振り返り

毎時間の「初めて分かったこと」、前時と比較して「改善できたこと」を振り返らせ、次時に対する意欲の向上を図った。

イ 題材全体（教科横断的な学習）の振り返り

「教科横断的な学習」を貫く問いの中でも、特に『社会の一員として、運動を支えること』に着目し、自分たちがどのような役割を担うべきなのかを考えさせるきっかけとなるように振り返りを設定した。

② 家庭科における「振り返りの工夫」

ア 1時間授業ごとの振り返り

「今日の授業で学んだこと」「さらに学びたいこと」等、本時の授業内容に合せた振り返りを設定した。

イ 題材全体（教科横断的な学習）の振り返り

家庭科の学びだけでなく、体育の学びも含め、『子どもに関する学習』を学ぶ意義・目的は何か。」学びの意義について振り返らせた。このことが「教科横断的な学習」を貫く問いの答えに近づくと考えた。

2 研究の実際

検証1 高等学校第2学年 保健体育科・家庭科 単元名 「共生社会の実現に向けて」

(1) 本単元の授業設計:教科横断的な学習について

① 「共生社会の実現」の視点からの授業構成

保健体育と家庭科における「共生社会の実現」に関係する2領域を下記のように配列した。

月	保健体育科 (保健) 体育科(スポーツ総合演習)	家庭科 (家庭基礎)
10月	加齢と健康 スポーツを通じた社会参画 ・高齢者と交流体験	家族・社会との共生 ・子どもと共に(保育)
11月	・幼児の運動プログラム 作成と交流会	
1月		・高齢社会と共に(6H)
生徒の視点からみた「共生社会の実現」としての学習 高齢者理解と高齢社会:体験交流(保体)→理論(家庭) 幼児理解と保育環境:理論(家庭)→体験交流(保体)		

② 幼児理解と保育環境の授業構成

表1 「幼児の運動プログラム」「保育」の授業構成

保健体育科 (体育)	家庭科 (家庭基礎)
「幼児の運動プログラム 作成と交流会」	「子どもと共に(保育)」
①②幼児の運動プログラム作成	①乳幼児のからだの発達 ②発達の個人差について ③乳幼児の心・言葉・遊びの発達
③④幼児との事前交流	④親の養育態度と子どもへの影響(ロールプレイ)
⑤⑥プログラム修正と幼児への接し方	⑤お話しづくり
⑦⑧プログラム提案のためのリハーサルと準備	⑥育児休業と保育環境
⑨⑩幼児との交流	⑦交流会の振り返りと学習の意義 ⑧赤ちゃん交流会

(2) 指導の実際

① 保健体育科(体育編)における指導の実際

ア 「幼児の運動プログラム作成」授業(表1:①②)

幼児の運動プログラムを作成するにあたり、教師側から「走運動」・「ダンス」・「ゲーム」の3つを考えていくことを提示した。班を編制(1班6～7名)し、『ルールが簡単なこと』『動きが複雑すぎないこと』を考慮する際のポイントとして伝え、各班でそれぞれの運動を考えさせた。その後、各班で考えた3つの活動をプレゼンテーション・実演し、他の生徒や教師から課題や問題点を伝えた。他の班との比較や教師からのアドバイスを得て、再び各班で改善点を話し合い、それぞれの活動内容の修正を図った。ただ、幼児の運動能力については想像の域を超えず、幼児にとっては少し難易度の高い運動を作成している班が目立った。

徒や教師から課題や問題点を伝えた。他の班との比較や教師からのアドバイスを得て、再び各班で改善点を話し合い、それぞれの活動内容の修正を図った。ただ、幼児の運動能力については想像の域を超えず、幼児にとっては少し難易度の高い運動を作成している班が目立った。



【運動プログラムについての話し合いとその修正】

イ 「幼児との事前交流」授業(表1:③④)

最終的に運動プログラムを修正するにあたり、幼児と事前交流を計画した。この事前交流の目的は、自分たちが事前学習した幼児期の動きや自分たちが想像している幼児の動きと交流する幼児の動きとのギャップを肌で感じることである。生徒の目標は「自分たちの作成した運動に必要な動きができるかどうかを確かめること」と設定した。各班で役割分担をし、保育園で実際に行われている活動と一緒にいった。その活動の中で、目標を意識した行動や声かけが見られる場面を数多く目にした。幼児との交流活動で得た経験知は運動プログラムを作成する上で、大いに活用された。

また交流後の反省では、『新たな気づき』や『幼児に配慮すること』など、自分たちが体験した中で感じた意見が各班から発表し、その意見を全員で共有した。この事前交流は交流会に向けた準備をする上で、生徒のモチベーションに大きな影響を与えた。



【幼児との事前交流】

ウ 「幼児との交流会」授業(表1:⑨⑩)

運動プログラムの修正とリハーサルを経て、交流会を迎えた。交流会で実施する運動プログラムを「リズムダンス」・「しっぽ取り」・「リレー」とし、それぞれ6名が教師役を担当した。また、その他の生徒は園児と2人組になり、活動の補助役を担当した。

教師役が全体説明をし、園児と2人組を組んだ生徒が園児の活動状況を見ながら、園児に補助説明することにした。事前交流をしたことで、生徒と園児のコミュニケーションもスムーズに取れていた。また、グラウンドや体育館での活動も考えたが、安全に考慮し、転倒があってもケガしにくい柔道場を使用することにした。

教師役を担当した生徒は丁寧で分かりやすい言葉遣いに努めたり、実演を交えたりするなど、説明を工夫する場面が随所に見られた。また2人組の生徒が幼児に対して、動きの修正や励ましなどのコミュニケーションを積極的に行ったおかげで、想像以上に、幼児たちも活発に取り組むことができていた。



【幼児との交流会：運動プログラムの実践】

② 家庭科における指導の実際

ア「発達の個人差」の授業（表1：①）

幼児との交流体験を実施するにあたっては、幼児の発達には個人差があることの理解が欠かせない。この理解を促すために、ケーススタディーを行った。

1歳になったばかりの子どもを持つ友人がいます。その友人から、「周りの同じ年頃の子は、1人で歩くことができるのに、うちは『伝い歩き』がやっと。心配・・・」と相談を受けました。何と言ってアドバイスしますか。

まず個人で考え、班で協議させた結果、以下のアドバイスが挙げられた。

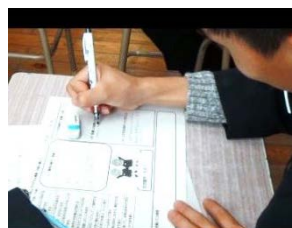
- ・病院に行って、診察してもらおうといいのでは。
- ・発達には個人差があるから、あまり心配しなくてもそのうち歩くよ。
- ・練習の仕方を考えてみるといいのでは。

自分たちの考えたアドバイスが、真に相手の立場に立ったものであるのか熟考させることで、発達の個人差を含めた育児上起こりうる問題に対しては、周囲の人々の在り方や配慮の仕方が重要であることを理解させることができた。

イ「交流会振り返りと学ぶ意義」の授業（表1：⑦）

体育の時間に実施された「幼児との運動交流会」を幼児の心身の発達の視点で振り返り、体験の共有化を図った。これにより、発達には目安があるもの

の多様な発達の在り方に気付くことができた。



- ①園児の様子・特徴
(発達の目安を参考にして)
- ②交流中に配慮したこと
- ③配慮した結果どうだったか
- ④次の機会に配慮したいこと
- ⑤班員の報告を聞いての感想

【個人での振り返り】

【振り返りの内容】

自分の事を楽しそうに話すことは、共通している。

目線の高さまで、配慮したんだね。

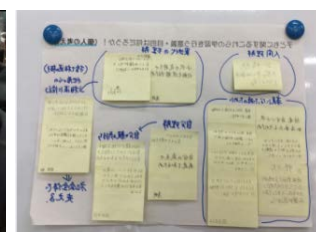


自分が担当した子とは、真逆だ。

同じ5才でも行動のスピードが違う。

【交流体験の共有化】

その後、家庭科と保健体育科で学習してきた「子どもに関する学習は、何のために学ぶのか、目的は何だろうか」という学ぶ意義について考えさせた。



【個人で考えた後、班でまとめている様子】

【生徒自身が考えた「子どもに関する学習の意義・目的」】

- A：将来親になった時、様々な場面に対応していくため。
B：自分の成長過程を再確認し、親や周囲へ感謝するため。
C：多くの人が子どもを理解（行動・思考）することで、子どもを産み、育てやすい社会につながっていくから。
D：人間の発達過程の理解につながる。
E：異世代への理解を深め、コミュニケーション方法を身に付けるため。

A・Bは個人の生活に関する考えだが、C・D・Eは社会全体の視野を持った考えとなっている。生徒に「共生社会の一員」としての視点を意識させなくても、社会の一員としての考えが出たことから、共生社会の一員としての資質や能力が育成されていると捉える。また、教師の考える題材観とほとんど同じ考えを生徒から導き出すことができた。

(3) 検証結果と考察

① 「豊かな学び」について

図1は、豊かな学びの「学習活動の充実(A・B・C)」と「成長の実感(D・E・F)」について見とる質問紙調査の結果である。教科全般の平均値と比較した。

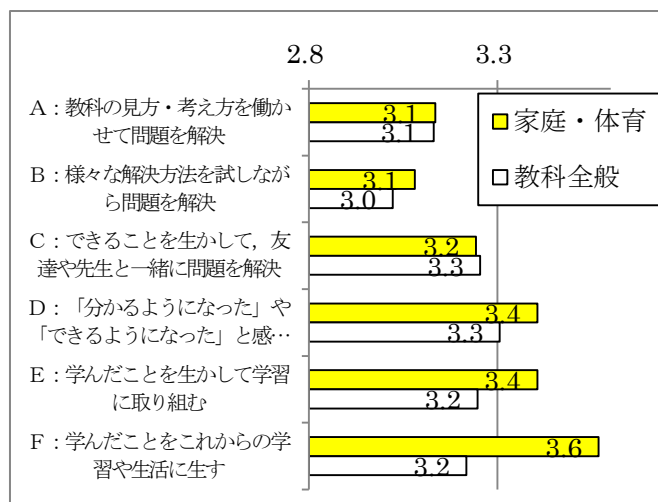


図1 豊かな学びの充実 4件法
体・家による教科横断的な学習 (n=38)
教科全般7教科 (n=277)

「学習活動の充実」については B, 「成長の実感」は D・E・F の3項目全てに教科全般の平均値より高い結果を得た。特に E・F は顕著に高い。これは、視点1①の教科を横断して、他教科の学びを実際に活用する場面、さらに、学んだこと(知識)を現実社会に生かす場面を設定したことが、高い評価につながったと考える。視点1による学習をきっかけに、生徒自身が主体的に、同一教科内はもちろん、他教科における学びも関連付ながら学びを実生活に生かしていく力、すなわち豊かな学びを実践する力が育成されつつあると考える。

② 「未来の創り手」について

ア 未来の創り手につながる主体性について
「積極的な自発的行動」「自己決定力」「自己表現力」の3つの姿で検証した。結果は図2のとおりである。

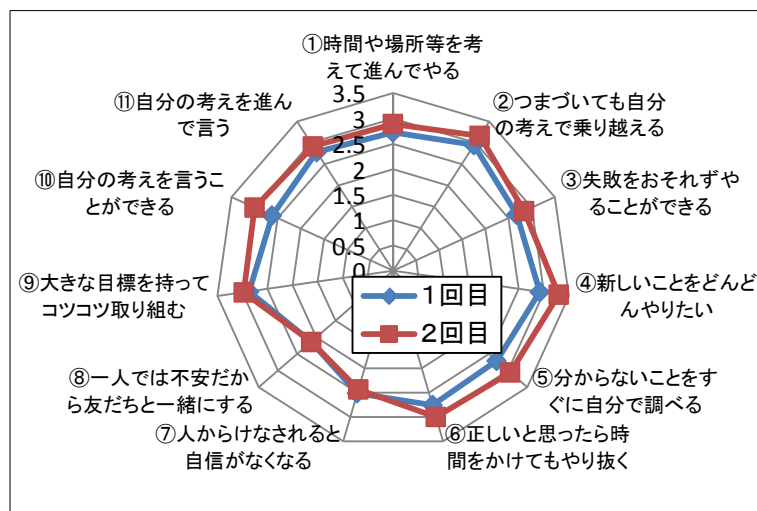


図2 主体性に学ぶ質問紙調査 4件法 (n=38)

自己決定力の⑦⑧の伸びは見られなかったが、その他は全て値が上昇しており、主体性が高まった。

イ 「共生社会の実現」について

共生社会の実現に向け、社会の一員として、大人になった私たちが果たすべき役割は何だろうか。

授業の前後に、「教科横断的な学習」を貫く「問い」に対する考えを文章記述させた。授業の中で、共生社会の定義付けは行わなかったため、生徒自身の実感(経験)を伴った「思い」から導き出された文章となる。テキストマイニングで分析した結果、授業前は、単純に「人」とのつながりや、男女が協力して共に「働く」ことを、共生社会と捉えていた。授業後は、文章量が増え内容が変化した。「自分」が社会の中で何ができるか、特に「子ども」を育むために、「親」の立場に加え、社会の一員として、社会生活とどのように関わるべきなのかを考え始めている。視点1・2の取組により、実感を伴いながら、共生社会の概念が形成されつつあると捉える。今後、高齢社会分野を学習することで、共生社会の概念がさらに深まり、実践力も育成され则认为。

3 研究のまとめ

(1) 成果

視点1①の視点(教科横断・外部資源の活用)を意識し、学習課題・内容を現実社会と関連づけ、学びの意義を実感しながら、習得した知識・技能を活用して課題を解決していく学びから次の成果を得た。

保健体育科：異世代の運動を「支える」経験ができたことは、高校生のスポーツの価値観を変えた。
家庭科：体育の取組とリンクすることで、乳幼児に対する関心や意識が高まった。
全体：学習への地域社会の協力に対して感謝の気持ちを持つと同時に、それが自分たちの果たすべき役割と気付くきっかけとなった。同時に共生社会の概念とその実現に向けた実践力が形成されつつある

(2) 課題

家庭科と保健体育科だけでなく、他教科においても各々の年間指導計画を共有・連携し、CMを意識した授業デザインを展開することが今後の課題である。さらに検証を重ねることで、CMの視点からの学習の効果と可能性を探っていきたい。

《引用・参考文献》

・文部科学省(2016)中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」